

スポーツと「新しい社会運動」

——新潟 Alliance2002の活動を例に——

坂 な つ こ

はじめに

2003年は、日本サッカーのプロリーグであるＪリーグが開幕して10年という節目の年であった。その10年のなかで最も大きなイベントは2002年の FIFA ワールドカップ（以下 W 杯）韓国・日本大会であったのではないだろうか。サッカーの W 杯はテレビ視聴率でオリンピックを上回るビックイベントであり、初のアジア地区、初の共催として行われたこの大会は、両国の各地でパブリックビューイングや街頭応援がみられ、「にわかファン」という言葉が社会現象となるなど、多くの人が何らかのかたちで「W 杯フィーバー」を体験したと思われる（予選リーグの日本―ロシア戦の66.1%という視聴率が物語っているように、その日は一橋大のキャンパスからも学生の姿が消えてしまった！）。サッカーファンにとってはもちろん、そうでない人々にとっても W 杯の開催というのは大きな影響を持つものであったのではないだろうか。

他方で、昨年のＪリーグで、Ｊ２アルビレックス新潟がＪ１に昇格したこともまた、大きな意味を持っている。アルビレックスは、元々は W 杯の誘致を機につくられた（開催都市誘致にはＪリーグチームがあることが条件のひとつであった）。同様な設立の背景を持つ大分トリニータは W 杯後に昇格を決めたが、アルビレックスはサッカー人気が盛り返したそのチャンスに昇格を逃すこととなった。しかし、集客数はＪリーグでもトップを誇るものであり、2003年、ホーム最終戦でＪ２優勝そしてＪ１昇格を勝ち取ったのであった。ホームであるビックスワン（スタジアム）をオレンジ色（チームカラー）に染める 4 万人のサポーター

の姿は、「サッカー不毛の地」を返上させ、「地域に根づく」というＪリーグの理念を示すかのようにであった。そこには一過性の「イベント」（Ｗ杯やオリンピック）だけによらない、新しいスポーツのあり方が感じられるとはいえないだろうか。

サッカーにおける「ファン」は「サポーター」と呼ばれる。この言葉は、Ｊリーグがはじまった93年以降広まり、今や他のスポーツでも用いられるが、最も大きく注目されたのは1998年Ｗ杯フランス大会であったといえる。この大会で、日本代表は挑戦43年目にして、はじめて本大会出場を果たした。この大会が「ボランティア大会」と呼ばれるように、多くの市民ボランティアによって支えられた大会であったことは日本のサッカーファンにとって強く印象に残るものであった。Ｊリーグの理念とされる「百年構想」と合わせて、サッカーファンはよりいっそう「12番目の選手」である「サポーター（支える人）」として、単なる「観客」の枠を越え、スポーツを「文化」と捉え、サッカーだけではなく日本のスポーツ界を積極的に変革していこうという意識を持ち始めたといえる。

このようなサッカーサポーターの意識の変化は、日本社会の構造変化におけるスポーツの場の変容において生じたと捉えることができる¹⁾。そこでは、従来の「観客」あるいは、「スポーツファン」の枠組みをはみ出し、A.メルッチが「新しい社会運動」と呼ぶ特徴のいくつかを示す活動をみることができる²⁾。これらは、現代のグローバリゼーションという状況のなかで変容する社会のもとであられる、多様な市民たちの運動のかたちと重なり合うと考えられる³⁾。このことが、日本のスポーツ研究や社会学的研究のなかで、従来あまりスポットがあてられてこなかったといえる「スポーツファン」の研究をする意義であろうし、本稿で「ファン」から「サポーター」への変化に注目する理由であるといえる⁴⁾。

ここでは、そのような活動のひとつとして、新潟を拠点とするNPO法人「Alliance2002」について紹介する。Alliance2002では、サッカーという軸を共有しながら、サッカーには「する」、「みる」、「支える」、あるいは「語る」といった多様な楽しみ方がある、という考えを持ち、様々な指向のグループが緩やかに連帯するという形態をとる⁵⁾。「プレイヤー」や「観客」に限定しないスポーツに

対するこのような考え方や、いわゆる「トップダウン」ではない水平的で多様な組織のあり方は、日本の伝統的スポーツシステムにはみられなかった形態であり、従来の企業や学校(部活動)を中心としたものから、新しいスポーツのあり方へと転換させるものといえる⁶⁾。そして現在の状況のなかでみると、サッカーサポーターのこれらの活動は、「まさしくグローバリゼーションという時代の中での局面の中で現れている『多様な渴望の噴出』と多様化する『自律的意志決定』の形態の一つ」とみることができるのである⁷⁾。

1 Alliance2002(新潟)とは

Alliance2002は、1998年にJFLアルビレックス新潟のサポーターグループとして立ち上げられた。はじめはグラウンドでのゲーム観戦や応援をする、いわゆる「ゴール裏」として出発した。だが、1999年にアルビレックスがJ2に昇格した際に、特定チームの応援をするという色合いを薄め、J2、アルビレックスのホームゲームの運営サポート、各種イベント運営などを手がけるボランティアグループ「スピリット・オブ・にいがた(以下、SON)」を発足させることになる。その際、「ゴール裏」サポーターは「ウルトラにいがた(UNI)」と名前を変え、その連合としてAlliance2002が立ち上がるのである。発起人であるヘッドクォーター(HQ)の一人は、その発足について、「サッカーって応援するばかりが楽しみ方じゃないという考えを具現化するかたちでボランティアのグループを立ち上げた」と述べている。

Alliance2002は、次の図をホームページに掲載し、「Alliance2002は、草の根の活動を通して2002年のワールドカップ新潟開催を盛り上げよう、そんな目的から生まれたムーブメントです」と述べ、五つの柱とHQによる活動の形態を表現している⁸⁾。

- i) 「ウルトラにいがた」(以下UNI): 「ゴール裏」で日本代表や新潟におけるチームを応援するサポーターグループ。
- ii) 「スピリットオブにいがた」(以下SON): 新潟で行われるJリーグチームの試合会場での運営等ボランティアグループ。



iii) 「もくはち CLUB」：アルビレックス新潟が所有する芝のフットサル場を借りて行われているフットサルクラブ。参加者は当日参加料（500円）を払い、その場でメンバーを組む。木曜日、夜八時開催の意味。現在参加者が増えたため初心者を対象とする「もくはちマンデー」（月曜日開催）も開催。

iv) 「サロン2002 in にいがた」（以下「サロン」）：月一回程度（現在は不定期）ゲスト等を招いて様々な観点から「文化としてのサッカー」について意見を交換する場。

v) 「広報」：彼らの活動を対外的に示すだけでなく、ワールドカップに関するものからアルビレックスや北信越リーグに所属するチームである新潟蹴友会、学生リーグに至る新潟サッカー界の情報を、インターネットのホームページやスタジアムでのフリーペーパー配布などにより発信している。

vi) ヘッドクォーター（HQ）：各活動を支援し、Alliance2002としてまとめる役割を持つ。

2 参加の実態

次に、「スポーツボランティア」という比較的新しい領域で活動する SON と、Alliance2002という組織を特徴づける HQ に対して行ったインタビューおよびアンケートをもとに、Alliance2002という組織の概観を報告する。回答人数はそれ

ぞれ、HQ 7人、SON13人(2001年11月実施)となっている。主たるHQには対面でインタビューも行った⁹⁾。

「ゆるやかな連帯」がコンセプトである Alliance2002において、それぞれの活動への参加の様子は、どのようなものであろうか。

Alliance2002の複数の活動に対しては、全てのHQが複数の活動に参加している(参加したことがある)と答えている。それに対してSON会員については複数の活動に参加しているのは三分の一である。さらに、この複数の活動のなかには、サポーター組織に参加しているとの回答はゼロであった。つまり Alliance2002という組織の中で活動の中心となっているサポーター組織と、ボランティア組織のメンバーは完全に住み分けがされているということがわかる。

これは、第一にそれぞれの活動形態により制限されている。例えば、アルビレックスの試合時、UNIメンバーは観客席(ホーム側ゴール裏)で応援する。同時にSONメンバーは、スタジアムの設置、観客誘導、電光掲示板操作、清掃などゲーム周辺で支援をしているということがある。しかし、それだけではなく、「サッカーを見ること」あるいは「(自分の好きな)チーム・選手の応援」が目的でありグラウンドでの声援によって文字通りゲームを盛り上げようとするゴール裏サポーターと、ホームでもゲームの円滑な運営のために中立的で秩序だった態度を求められるボランティア間では、軋轢が生じやすいことは考えられうる¹⁰⁾。

だが新潟においては現在 Alliance2002内部だけに限らず、両者の関係は良好であるとHQの一人は述べている。そしてこの一見相容れることのないサポーターグループとボランティアグループが同組織に所属しているということが Alliance2002の特徴でもある。他方で、「ゴール裏」内部でも「サッカーをしないで語るだけ」のサポーターとプレイをしたことのある(「サッカーを知っている」)サポーターのあいだでも軋轢が生じることがインタビューでは述べられているが、現在この部分をつないでいるのが「もくはち」であるとされる¹¹⁾。このような各活動のバランスが、Alliance2002の掲げる「観る(応援する)」「蹴る」「語る」そして当事者として「参加する」というコンセプトを可能にしていると考えられる。

では、個々のメンバーはどのようにして Alliance2002というひとつの集合体にコミットするようになるのだろうか。

活動への参加理由（複数回答）として挙げられるものは、「サッカーが好きだから」がもっとも多く、次いで「ボランティアに興味があった」「全く知らなかった人と仲間になれるから」「新潟に何か貢献していると思えることをしたかった」となっている。また、「2002年に向けて何らかの活動をしたかったから」とある。それに対して、HQ はほぼ同じ傾向を示すが、「仕事や家庭以外で、自分が必要な場所を求めている」という項目に三分の一が回答をしており、より「自己実現」的な指向が強いといえる。

ここでは、サッカーをキーワードとしながら、地域、精神的な充実、コミュニケーションなどの多様な動機がみられる。このような多様な参加動機を、Alliance2002は組織としての整合性へと統合していくのだろうか。

メルッチは、しかし、集合行為とは、ある整合性を持った経験的現象ではないとする。集合行為とは、可能性と抑制が交錯する場で展開される目的探求的な方向性の産物であり、行為者が集合行為を生み出すときには、自己と環境（他の行為者、入手可能な資源、機会、障害）とを定義するとする。このような諸定義は単純なものではなく、相互作用・交渉・紛争によって生み出される」とされ、整合性を前提とすることはできない。そのような多極的な行為システムにおいて諸個人は、揺らぐことのない「われわれ意識」を形成するために、少なくとも三つの方向に向かって一1) その行為の目標、2) 利用しうる手段、3) 行動が起こる環境一、お互いに骨を折りながら交渉し、それに適合するように努めているのである¹²⁾。また、個々の機軸においても、短期的目標と長期的目標、資源の活用などにおいて軋轢や緊張が生じる。先に述べたボランティアとサポーターの軋轢、「もくはち」による資金の配分、また個々のメンバーにおいてもそれぞれの活動動機や目標との矛盾、あるいは仕事・家族と活動の葛藤・妥協など、様々な緊張関係を含みもつなかで、自己の活動を構成していくといえる。個人のアプローチは多様であり、それも活動に参加する過程で変化するものである。集合行為とは、対照的で多様な要求を満たさなければならないものであって、決して単純な行為

者の意志表現ではないといえる。

3 HQ の役割

メルッチは、「この交渉に対して、より永続性があり予測可能な秩序を与えようとするのが、リーダーシップの形態であり組織形態である」とする¹³⁾。そこでは、行為者がその行為の「目標、手段、環境について交渉する能力」に依存しているのである。Alliance2002においてはHQがどのような「能力」をもっているかが組織の永続性に関係してくると考えられる。

新しい社会運動に関与する行為者は極めて多様であるが、諸個人が集合的アイデンティティを構築する能力は、彼らが利用可能な(学歴/専門的技術/社会的技量等)資源群に根ざしている。その上で、運動の社会的構成要素は、a)「新中間階級」あるいは「人的資本階級」、b)労働市場においてマージナルな地位にある「豊かな周縁」、c)独立的な「旧中間階級」(農民、職人)である。第一グループの「新中間階級」は二つのグループから構成されており、一つは「既存のエリートに挑戦する新エリート層」、一方は「機会の余剰とシステムの抑止の両方を経験した『人的資本』専門職」である。その特徴としては、「より伝統的な政治的・社会的ネットワークに深く参与」し、「学歴が高く比較的若い」ことを挙げている¹⁴⁾。このような指摘は、とりわけHQと重なる。大半が大卒者であり、20代後半～40歳以下で構成されている¹⁵⁾。

しかし、個々の活動を支援する繋ぎ役としてのHQが、単なるまとめ役なのか、それとも向上心をもって活動に積極的に関われるHQになるのかという課題が生じる。「HQ会議での意見交換によって、そこで勉強して育成されるのではないか」という意見がみられる一方で、「そこで意見は言えても、それを実行に移していくことができるのかという、実行力」が問題であり、それを発揮できることが「代わりのいない」HQの特徴でもあるという。「実行力」とは潜在的な資源と関係すると思われる。彼らは、自分たちが利用可能な資源を効果的に用いることができる。情報・資源へのアクセス、利用に関して高位にあるものが、組織の主導権を握ることになり、それが活動への参加率や、役割分担、権力委譲

などに影響を与えている。それが可能なのは「新中間階級」「人的資本階級」であり、彼らは自らの教育上・職業上・社会上のステイタスにより提供されるアイデンティティ資源を、初期の段階で利用することができるからである¹⁶⁾。人選だけではなく、職業上のスキル、経験等が有効に発揮される場が Alliance2002 となっているといえる¹⁷⁾。

HQ の中心は県外出身者であり、転勤の可能性をもつ。実際に W 杯を前に発足時からの中心的 HQ が転勤で県外へ転出している。そのため HQ の引継や育成が重要な課題となっている。ここには、既存の社会システムにより深く関与している県内出身者を増やしていきたいという意見も述べられるが、企画力や運営能力を備えた人間は「既に新潟の既存の組織に何らかの形で取り込まれている可能性が高い」という。これは、HQ の多くが新潟という地域において「豊かな周縁」であるということと、「新中間階級」に既存の社会システムへアクセスするというような流動性が与えられている場合、それらは紛争当事者から対抗エリートへと、その役割をシフトすることができるという点と関わっている。紛争当事者が活動の中で交渉し淘汰され、新たな権力として発動できる可能性を示唆している一方で、すでに対抗エリートに組み込まれている資源をどのようにして調達するかという問題を残しているといえる。

4 集合的アイデンティティの多元性

しかし、Alliance2002は「緩やかな連帯」をその形態として掲げており、個々のメンバーがどのようにして集合行為に関与することになるのか、すなわち多様なアプローチや動機から加わっている行為者が、「共通の方向性を形成し、それに基づいて一致団結して行動することを決意する過程」とはどのようなものなのかをみる必要がある。メルッチは、「いかなる動員の過程も真空状態で始まることはない」とし、「すでに存在している社会的関係のネットワークが触媒」となり、個人の集合行為における投資を軽減するとする¹⁸⁾。既存のネットワークが、地縁、血縁、学縁といった社会的関係を基盤とし拡充していく一方で、Alliance2002やその他のサッカーサポーターグループでは、インターネット等の情報メディアを

媒体に活動を広げていくという特徴がみられる。

Alliance2002へのアクセスでは、参加を促した媒体(活動に関する情報源)は、SONメンバーでは「友人から」が4人、独自に「ホームページから」アクセスしたのが4人、そして最も多かったのが、「アルビレックスの公式ボランティアに参加している中で、一緒に活動するSONから誘われた、魅力を感じた」というものである。HQでは、実際に活動を見て参加したのは2人であるが、その他は「友人から」が最も多く、それ以外では仕事や個人的な関わりから知らず知らず参加しているようになったという回答であった。インターネットも利用されているが、顔と顔を合わせたコミュニケーションによって参加が促されたというのが、どちらも最も多い。

他方、実際の活動での彼らの連絡手段は、ホームページへの書き込み、メーリングリストが主であり、ここではインターネットが中心となる。例えば、SONの試合会場でのボランティア活動で、活動後反省会を行うが、その詳細については後日ホームページに掲載される。また、試合によってはその場での反省会を行わず、随時、気づいた点をホームページ内の掲示板に書き込み、ネット上で意見調整をするという手段をとっている。これらは、制限されたものではなくメンバー以外にもネットにアクセスできれば自由にみることができるオープンなものである。

メンバーの調達ネットワークが、対面的なコミュニケーションではありながらも、支配的なシステムにあるような、地縁、血縁、そしてとりわけスポーツの場合に重要な学縁というネットワークを基盤としていないことによって、その後の関係形成も限定的ではなく、より開放的で水平的なネットワークが可能になると考えられる。他方、インターネットへのアクセスができることが、このネットワークの参加への前提ともなるといえる。ここでは、HQと同様に、情報へアクセスできる資源が問われるといえる。

活動を行っていく中での意識については、「(Alliance2002の)活動以外で交流をもっているか?」という質問に対しては、SONのメンバーは半数が「ある」と答えた。対してHQにおいては、ほぼ全員が「交流の場をもっている」と答

えており、開きがある。だが、SON メンバーにおいても今後 Alliance2002以外での交流の場を持ちたいという意識は高く、13人中11人が何らかの形で行いたいと考えていた。

人的交流に関しては、「Alliance の活動に参加して良かったと思う事」という質問で、SON メンバー、HQ ともに「新たな友人や仲間ができた」という回答が最も多く、「活動自体が楽しい」「自分自身の啓発につながった」という回答が続くように、肯定的であることがわかる。

「(Alliance2002の活動で)これから参加しようと思っているもの、または興味があるものは？」では、SON の三分の二の人が複数グループへの参加意志を示した。

だが、SON メンバーの中ではアライアンス (Alliance) という形態や、組織自体を意識せずに活動している場合もある。例えば「『グループ』という言葉を使うほど、連帯感はあまり……。ボランティア活動をしている仲間という思いはありますが」という意見や、「他の Alliance2002の活動のことはよくわかりません。これからも他の活動には関心がありません」など各メンバーには意識格差があると考える。

これは Alliance2002という組織への帰属意識の薄さともいえるが、他方で多様なアプローチが可能であること、Alliance2002のような団体が「組織維持先行」でないことを表している。

HQ の一人は、「はたから見れば Alliance という言葉はなくなってもいいですよね、別に。それぞれの活動が個々として、活動が進んでいけば Alliance という名前だったり、形式は別に (中略) 表に出なくてもいいと思っています」と述べる。

従来型の地縁、学縁などがベースの場合、人的ネットワークはほとんど「地元」を基盤に形成されており、物理的・情緒的に存続しやすい。他方で、Alliance2002のような場合、その集合的アイデンティティは、人的ネットワークが柔軟であり、常にプロセスとして構築されるため、その方向性は流動的ともいえる。これらのネットワークのなかで、「個人は相互に影響し合い、交渉し合い、

そうすることで行為のための概念的・動機的フレームワークを構築する」のであり、参加の動機付けもまた、相互作用を通じて構成・発展されるものであるととらえられる¹⁹⁾。ここでは、集合的アイデンティティがどのように生み出されているかをみる必要がある。

メルッチは、「集合的アイデンティティとは、相互の交流している諸個人によって生み出される、相互作用的でありなおかつ共有された定義である。そのような人々は、自らの行為の方向性に関心を持ち、それと同時に、その行為が起こる機会やその拘束の現場に関心を持っている」とする²⁰⁾。そのような、集合的アイデンティティは、1)行為の目標・手段・環境に関する認知フレームワークを形成する、2)伝達・交渉・意志決定をする行為者間の関係を活性化する、3)諸個人がお互いを認識し合えるように、感情的な交流を行う、という三局面を含むとする²¹⁾。

W杯というイベント(短期的課題)がなくなった今後、長期的課題(百年構想、草の根からのサッカー振興、スポーツ文化、地域など)を、どのようにそれぞれが認識しえるかが重要になってくる。また、メンバーの関係の活性化をどのように促すか、新しい人材をどのように呼び込むか、またインターネット上の意見交換だけではなく、Face-to-Faceのコミュニケーションの場として、サロンやもくはち、ボランティアの場でのやりとりも重要であるといえる。

他方でAlliance2002という組織については、ホームページ上では目標を掲げているが2002年以降の形は流動的である。その特徴について、発起人であるHQの一人は「常に具体的に、目先の何かとのやりとりの中で、結果として方向性が決まっていく」と述べている。

この言葉に表されているように、活動の中で変容していくその動きについて、HQにおいても「こうならなければならない」という義務感や、組織における拘束力というのは、強固なものではない。それは、彼ら自身が現在進行中である活動を認知し、自己再帰的な能力によって、進むべき方向性を修正しながら活動しているからと考えられる。

これについて、メルッチは「複合システムでは、合意形成のために利用可能な

空間は、限定され一時的である。差異は変化し、紛争はシフトし、合意は満足をもたらさなくなり、新しい支配形式が絶えず出現するために、これらの空間は、継続的に、しかも迅速に再定義されねばならない」とする²²⁾。Alliance2002のようなネットワーク型の組織においては、この再定義が迅速に行われなければならない。短期的な戦略や目標を具体的に掲げることによって求心力とし、常に長期的な目標に照らして活動の中で目的と戦略とを修正し続けなければならないのである。

5 再帰的過程としての「サロン」

ここで、再定義の場として重要になるのが「サロン」であろう。これは、従来のスポーツファンと異なる活動としてもあげられる。サッカーを軸に様々な分野からゲストを呼ぶなどして、シンポジウム等を行うのだが、このような定例会が、「学習過程」として働くのである。

以下に「サロン」の開催テーマを示す。(ホームページより作成。ここではパネラー／ゲストは所属のみ)

《サロン2002 in にいがた》

プレイベント 99.4.23 (金)「メディアと共に語る新潟サッカーの今と未来」新潟日報, FM しばた, FM 新潟, テレビ新潟

第1回 99.5.21 (金)「サッカーくじをホンキで考える」文部省スポーツ振興投票準備室

第2回 99.6.25 (金)「新潟におけるスポーツビジネス」株式会社テレビ新潟放送網 (TeNY)事業部長

第3回 99.7.17 (金)「サッカー振興を市民の手で」筑波大学付属高校・サロン2002, シド・ファイナル・アーツ, 日揮, 写真家, 文部省

第4回 99.8.20 (金)「スポーツボランティアの理想と現実」長野県サッカー協会

第5回 99.9.19 (金)「W杯, 準備のあんばいはどんげですか?」2002年W杯新潟県開催準備委員会事務局長

第6回 99.10.22 (金)「写真展・サポーター新世紀プレビュー／欧州最深部を

行く」写真家

第7回 99.11.19 (金)「十日町市における公認キャンプ招致活動について」W
杯公認キャンプ十日町誘致実行委員会

第8回 99.12.10 (金)「新潟のサッカーシーンを語る」新潟県サッカー協会

第9回 00.1.28 (金)「サッカー界ブッタギリ」プロコーチ／解説者

第10回 00.2.18 (金)「スタジアムではビラを撒け!&草サッカーはサッカー
界のフロンティアー」草サッカーなんでもコーディネーター

第11回 00.4.14 (金)「サッカーにおけるメディカルサポート」アルビレックス
新潟チームドクター

第12回 00.4.17 (月)「日本代表を語る」日本代表コーチ

第13回 00.5.26 (金)「日本代表今昔物語」元日本代表 GK

第14回 00.6.23 (金)「Alliance2002の現状と今後」HQ

第15回 00.7.10 (月)「W杯新潟開催を当事者として考える」電通, 名古屋大
助手, 野村総研, 県サッカー協会理事長, 早稲田大教授, 新潟市青年ネットワー
ク

第16回 00.8.26 (土)「岐路に立つ草の根運動」サロン2002とのフットサル交流
HQ, 名古屋助手

第17回 00.9.29 (金)「PALRABOX (パラボックス) の挑戦」障害者サッカー
チーム PALRABOX メンバー

第18回 00.10.27 (金)「東欧ディープな旅〜ディナモを追って〜」写真家

第19回 00.11.17 (金)「朝鮮サッカーを語る」在日朝鮮蹴球団元北朝鮮代表

第20回 00.12.8 (金)「何をやる? どう仕掛ける? 開催地の市民として」新潟市
ワールドカップ総合対策室室長, 「ウエルカムにいがた! 2002」事務局長

第21回 01.1.26 (金)「笑顔で帰国してもらうために〜2002年へ向けた JSA の
アプローチ」NPO 法人日本サポーター協会

第22回 02.1.26 (土)「W杯記念 新春サッカーサロン」エジンバラ大教授,
ウィーン大講師, 韓国中央大講師, 立命館大教授

第23回 02.12.6 (金)「年末サロン〜2002年新潟を振り返る」アルビレックス新

潟業務部長，ゴール裏サポーター，毎日新聞記者，Alliance2002・SON 代表

内容やゲストは，サッカーのゲームやプレイに関するだけではなく，多岐にわたっていることが分かる。また，県のサッカー協会，W 杯推進室（県職員），文部省など，従来市民団体，ボランティア団体と対置されるセクションである公的機関からもゲストを招聘しているのも特徴的である。これらの学習会は，ホームページやビラ配りなどを通じて一般にも案内されており，Alliance2002のメンバーやサッカー関係者に限らず，その都度，参加費を払い参加できる。

月例会やシンポジウムなどの開催が重要であるのは，これが Alliance2002参加への「入り口」になるだけでなく，「学習過程」としての機能を果たしている点である。グループ自体が多様な主体から構成されるネットワークであり，学習会によるやりとりやその結果をとおして，新しい文化モデルや新しい関係諸形式の実験と実践が行われる。このようなモデル化は，柔軟性を持ち，運動自体の自己帰性が確保される場となる。運動が情報の交換・循環システムとなり，情報の読みかえや創造が生まれ，運動自体が「文化の実験室」としての場となるのである。

メルッチは，現代社会においては「物質の生産に代わって，記号や社会的関係の生産がその中心」となり，それゆえ社会が「意味の生産」に介入する能力を飛躍的に高めるとする。それによってそれまで規制を逃れてきた諸領域—自己定義，感情的関係，セクシャリティなど—にまで拡張され個人はこの中でコントロールされていっているのである。そのため，メルッチは「新しい文化モデルや新しい関係諸形態に向けての，さらに代替的な感覚や世界の意味づけに向けての実験」を行う運動の，新しいスタイル，コミュニケーション様式などがオルタナティブな文化コードの生産を行う可能性を持つとし，そこに新しい運動の意味を見いだすのである²³⁾。

おわりに—ポスト2002

HQ の一人は，Alliance2002のスタンスを「地方から」と「草の根から」の二

つである述べている。「百年構想」に共感しつつも、それを「中央主導の運営になりがち」ととらえ、「地方から」の発信を目指すのである。さらに、「草の根から」とは、「プレイヤーだったが、今は引退した。サッカーは好きだけどプレイの経験がない。転勤の為、仲間がいず、プレイや活動ができない。中学まではサッカー部だったけれど、高校のサッカー部にははいりそびれた」という「日本サッカー協会の目の届かないサッカーファンが、自己実現をできる集まりである」と考えていると述べるのである²⁴⁾。

そのような理念と活動は、意図するとしないとに関わらず、既存システムの不備や対抗的価値、あるいは自己の位置する環境を浮き彫りにしてしまうのである。例えば、Alliance2002が現在進めている地元 CP サッカー（脳性麻痺7人制サッカー）チームとの連携は、福祉制度や環境の整備を認識させもする。SON へのアンケートでは、「Alliance2002の活動に参加してから新潟への見方が変わりましたか」という質問では「変わった」と答えた9人のうち「今までより愛着を感じる」が大半であり、その他「新潟県民であることを意識するようになった」「市政や県政に対して敏感になった」とある。また、自由記述欄でも、「市民起点による街の活性化を行っていくべきである」と考える。各種スポーツ愛好家の欲求を市民レベルで整理して、市民が欲求を解消させる場を提供していく、「サッカーを通じて地域社会に奉仕（貢献）したい」とある。

行政や協会などとの既存システムとの関係について、活動が認知されつつある一方で、「ニュートラルに決裂している」との認識はHQに共通している。だが、今後については意見はさまざまであり、「一定の緊張関係は保ちながらも、協調できる部分がほしい。そういう関係であればいい。今の、それこそ情報も行き来しないような関係であるよりは、そちらの方が健全だと思う」。または「(行政や協会などの)団体との関係は、おそらく変わらないと思います。(中略)変わった時はSON(Alliance2002も含めて)が無くなるというか、いらなくなる」という意見もある²⁵⁾。

では、2002年が終了した今、Alliance2002はどのようなになっていくのだろうか。HQではほぼ全員がアライアンス(Alliance)という形態を意識して活動をし

ており、その連携が他のメンバーにも認識されることを望んでいるが、それが Alliance2002という組織の維持や固定に結びつけてる意見はみられない。例えば「スポーツボランティアのニーズというのは、アルビレックスがあり続ける限り、少なくとも新潟では残り続けるわけですね。（中略）それが SON という組織で残るかっていうのはわからないですけど、少なくともニーズがある以上は、われわれのなかでできあがってきたボランティアの人たちは、何らかのかたちでいつづけますよね。パタンと2002年が終わったからといって雲散霧消することはないですね。形は変えても、残り続けますよね。それでいいと思っています」。また、「組織のために何かをやるという考えではなくて、自分が何かやるための組織じゃなかったら、枠組みの中から外に出られないと思うんですよ。（中略）Alliance の機動力とか、名前とか、資金力とか、いろいろな部分をとにかく有効に使っていくことで、自分のサッカーに対する幅を広げていくと同時に、それが結果的に、また Alliance を一つのステージに引き上げられることになると思ってやっている」。

しかし、主要な HQ が転出後のインタビューでは、方向性は変わらないとしつつ、「ただ、それぞれの構成員がそれぞれのことをしているけど Alliance2002 に属してるんだよっていう、ある種一つの、共通のロイヤリティはほしいなっていうのは前からあるんですよ」という意見も述べられている。「サポーターだけじゃなくて、ボランティアというのもサッカーを構成している要素、仲間だよっていう。いつもは、やってなくても支えている柱はあって、その柱は何を支えているかっていうと Alliance2002を支えているんだよっていう、そういう帰属意識を持たせたい」と述べている。

Alliance2002は、一つのあり方として W 杯を前に NPO 法人資格取得という選択をした。HQ の一人は「実質的な部分で、NPO 法人化という形をとることによって、逆に次の世代の人を縛ることができるということ」だと表現している。義務と責任という「縛り」が生じるなかで、今後どのように多様な諸個人、諸グループと切り結ぶことができるかが、注目される。

メルッチは現代的な運動組織について、「もはや単に目標達成のための『道具

的』存在ではなく、そこではその運動自体が目標となっている。集合行為は文化的コードに焦点を当てるため、運動の形式そのものがメッセージとなり、支配的コードへの象徴的挑戦となる」と同時に、「日常生活の経験に根ざしているがゆえに、前政治的であり、政治勢力が完全にはその行為形態を代表できないがゆえに、超政治的である」という²⁶⁾。しかし、Alliance2002自身が既存の政治的勢力と結びつくことはあり得ることであり、そこでどのような軋轢が内外で生じるのか、いかにして集合体としての意見を調節する機能をもちうるかが鍵となるであろう。そこでは、常に、外部に対してはもちろん、内部に対しても開かれ、参加者諸個人が対等な立場にあることから、「個人的な変化と外的行為が結びつくことにより、集合行為は新しいメディアとして機能する。このメディアは、支配的なコードの側の沈黙した要素や恣意的要素を顕在化すると同時に、新しいオルタナティヴを公表する」可能性が見えてくるのである²⁷⁾。そしてその際に重要になるのは、「どのようにしたら集合行為を代表し、その特徴や自律性を失することなくその声が聞こえるような、表現のための民主的公共空間をつくることができるのか」ということであろう²⁸⁾。Alliance2002自体が、多様な意見や価値の交換がなされる意味交渉の過程となる。それは、サッカーという「趣味の領域」を介することで、「従来のスタイルとは対置されたものとして現れ、組織の自己再帰的性格をつくり出し、自己と他者、環境の解釈と意味づけ、共通課題とを絶えず認識し再構成することを可能とする」²⁹⁾。そしてそのことが、サッカーと多くの地域的課題や他の領域との結びつきを自覚化させる契機ともなり、多様な活動と連帯を生み出す可能性を持つといえるだろう³⁰⁾。

2002年のワールドカップ以後、各地のサポーター・ボランティアグループは、様々な形でネットワークを広げつつある。たとえば、「キックラブ」(宮城)では、ワールドカップの終了後(7月)いち早く、キックラブ代表、日本サポーター協会代表、JAWOC(W杯日本組織委員会)ボランティア経験者(埼玉、横浜)らによる「まつりのあとー宮城スタジアムとまちづくり」と題したシンポジウムを開催している³¹⁾。キックラブはワールドカップのために宮城県推進委員会のよびかけにより組織された、いわば行政主体の「市民グループ」である。W杯後

は市民グループ「キックラブアクティブ」として活動することとなり、スポーツボランティアを中心に NPO 化も検討されている。行政からの支援を離れて、どのようなあり方を示していくかが注目される。また、W 杯以前から行われている全国ホームタウンサミットでは、J リーグ、行政、民間ボランティア団体などが集まり、意見を交換してる。

他方で、このような「主体的」なあり方が、唯一の選択肢なのかという点については今後十分に検討する必要がある課題である。中野が指摘するように、「主体的」なボランティアと「主体的」に「動員」されることとの違いは非常に曖昧である³²⁾。

ワールドカップ終了後の J リーグ観客動員数は、開幕前と比べ増加がみられた。サッカーファンの拡大という意味で「ワールドカップ効果」は続いているように見える。しかし、このような「効果」は、サッカーファンの広がりだけなのか、あるいはサポーター・ボランティア活動が、新しいスポーツの場を形成し、市民社会における「市場とも政府とも異なる第三の公共性」の形成を促す動きとなるのか、今後の注目される。

サッカーというスポーツを柱として、緩やかな連帯を保ちつつ、様々な方向へと広がっていくようなサポーターたちの活動には、「差異と多様性の相互承認」を可能とするコスモポリタニズムの端緒があらわれているように思われる。そこに、偏狭なナショナリズムや市場の暴走を克服し、「根元的な民主主義」へとすすむ契機がはらんでいるといえるのではないだろうか³³⁾。

* 本研究は立命館大学ワールドカップ調査の一部であり、本稿で使用している資料等は、当調査をもとにしている。また Alliance2002 に関して WEB 上で公開しているものは許可をいただいて使用している（不許可転載）。

- 1) 清野正義他編著『スポーツ・レジャー社会学 オールターナティブの現在』道と書院、1995年。J リーグにおけるサポーターたちの活動は、多岐にわたってみられる。最も大きなムーブメントとなったのは、1998年の横浜フリューゲルスが横浜マリノスへと「吸収合併」された時のサポーターたちの署名活動（34万8千人分）、そして横浜 FC の立ち上げへとつながる行動であったといえる。
- 2) A. メルッチ『現在に生きる遊牧民 新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店、

1997年.

- 3) 齊藤日出治『国家を越える市民社会—動員の世紀からノマドの世紀へ』現代企画社, 1998年, メルッチ, 12—13頁.
- 4) 杉本厚夫編『スポーツファンの社会学』世界思想社, 1997年, 清水論「サポーターズカルチャー研究序説」『スポーツ社会学研究』第9巻, 2001年, など先駆的な研究がみられる. また, 英国におけるサッカーにおける暴力行為に焦点をあてた E. ダニングらの「フーリガン」研究はすでに古典ともいえるものである. N. エリアス/E. ダニング『スポーツと文明化—興奮の探求』法政大学出版局, 1995年など.
- 5) このようなスポーツのとらえ方は, 現在では東京都の「東京スポーツビジョン」(2002年, 教育庁生涯学習スポーツ部スポーツ振興課) などにも見られ, 総合型地域スポーツクラブ政策の「柱」とされている. ただし, ここでの「支える」とは主として施設整備のことである.
- 6) そのような理念を最もよくあらわしているのがJリーグ百年構想であり, 多くのサッカーサポーターが支持するものでもある. 『Jリーグ百年構想 スポーツで, もっと, 幸せな国へ.』下記, ホームページ参照.
- 7) 山下高行「2002FIFA ワールドカップとサッカーサポーター活動」『日本の科学者』Vol. 37, No. 7, 2002年. また, T. Yamashita/N. Saka, 'Another Kick Off; World Cup 2002 and Soccer Voluntary Groups as a New Social Movement', Japan, Korea and the 2002 World Cup, J. Horne/W. Manzenreiter [eds.], Routledge, 2002. 拙稿「サッカーファンは社会を変えるか—調査中間報告: 視点と仮説」『立命館大学人文科学研究紀要』No. 79, 2002年. 北口節子「スポーツへの新しいアプローチ—新潟におけるサッカーサポーターの事例」修士論文(立命館大学, 2002年3月), 参照. また, 和喰は, (90年代以降に広がる) 民間スポーツクラブでは, 一定のスポーツ欲求は充足できても運営等に主体的に関わるという「私的な自治組織としてのクラブ」本来のあり方を満たすことはできないと指摘している. 和食昭夫「地域スポーツの発展のために I」『スポーツのひろば』2000年, 3月, 21頁.
- 8) 文章は設立当初. 図, および現在のホームページのアドレスは下記を参照.
- 9) SON へのアンケートについて, 13人というのはアンケート調査としては数として少ないものであるが, 登録メンバーは, 「30~40人いるわけですけど, そのうちいわゆるアクティブに動いているのは15人から20人弱」(インタビューより)であることを考慮に入ると, SON の参加実態からかけ離れたものではないといえる. また, 2002年の SON 参加実態 (WEB 公開) でも, 平均人数は約10人 (J2 と天皇杯を合わせた23試合) となっている.
- 10) 設立当初にはそのような軋轢もあったとされる. また, SON のアンケートでは

参加動機（複数回答）で「サッカーが好きだから」のみをあげているのは1名であった。

- 11) Alliance2002の原資金はほぼ「もくはち」で補われており、資金の潤沢さ（経済的安定・自律性）も Alliance2002の活動を支える重要な要素である。
- 12) メルッチ, 16—17頁.
- 13) メルッチ, 18頁.
- 14) メルッチ, 54—57頁.
- 15) SON においても同様の傾向を示した。全員が40代以下であり、短大・大学院卒を含めると10人が大卒である。また、どちらもほとんどが専門職に従事している。
- 16) HQ は、Alliance2002立ち上げの際に、リーダーの立候補を募ったが、結果として既に中心となっていた数人のメンバーでの独自交渉で決められていった。しかし、その後は各活動の中で、頻繁に活動する固定化された参加者に、「個々のメンバーの成長に合わせて」（インタビューより）徐々に権力委譲するという方法を取っている。
- 17) 例えば Alliance2002がサポーターイベントを行うホールはHQの一人が所属する会社が所有している。W 杯期間中はここでいくつかのイベントが行われている。
- 18) メルッチ, 23頁.
- 19) メルッチ, 24頁.
- 20) メルッチ, 29頁.
- 21) メルッチ, 30頁.
- 22) メルッチ, 87頁.
- 23) メルッチ, 42—43頁.
- 24) 和食は「多くの場合、クラブを辞めることはその競技を続けることをあきらめることと同じだという現実」があると、日本の学校中心のスポーツ活動について指摘している。和食, 前掲論文, 20—21頁。他方で、新潟県では平成14年度より中学校での必修クラブが廃止されるなど、スポーツは学校から地域へとシフトされつつあり、そこにおけるスポーツの場の変容は、総合型地域スポーツクラブ政策とともに今後検討していく必要がある。例えば、名古屋を拠点に活動する今池クラブは、1984年にバレーボールクラブとして立ち上げられた。都市部の部活動の縮小を背景に、小中学生から社会人を含む多様な層が活動するクラブである。全国のクラブチームで初めて（財）日本バレーボール協会の「総合型（地域）クラブモデルチーム」に指定されている。学区や年齢の枠を越えたバレーボール教室の開催なども行っており、今後競技の普及と高度化の両立を目指す活動がどのような広がりを持つかが注目される。
- 25) アルビレックス新潟との協調も提起されるが、「インディペンデントだからよ

かったのに、結果としてアルビレックスのオフィシャルみたいな形になってしまうというのは違うのではないか」、「協会や行政と同じく、アルビレックスとも線を引いているべきだ」という意見も存在する。しかし、新潟を「ローカル」として活動する以上、「アルビレックスとの連携が鍵になる」という意見もある。

- 26) メルッチ, 79頁.
- 27) メルッチ, 68頁.
- 28) メルッチ, 81頁.
- 29) 山下, 前経書, 15頁.
- 30) このような地域的課題との結びつきは、各地のいくつかのサッカーサポーター・ボランティアグループの活動にみられる。また、グローバルゼーションにおけるこれらの活動、意味については、山下高行「グローバルゼーションの像 グローバリゼーションとスポーツ」『近代ヨーロッパの探求⑧スポーツ』有賀郁敏他著、ミネルヴァ書房、2002年を参照。
- 31) いくつかのサポーター・ボランティアグループの総括、シンポジウムがみられる。下記のホームページを参照。
- 32) 中野敏男『大塚久雄と丸山眞男 動員 主体 戦争責任』青土社、2001年。
- 33) 香山リカ『ぶちナショナリズム症候群』中公新書、2002年、中西新太郎「社会を剥奪された若者のバーチャル・ナショナリズム」『唯物論研究年誌8巻』青木書店、2003年。また、2002年W杯報道における韓国のナショナリズムに関しては、森津千尋「メディアイベントとしての街頭応援」牛木素吉郎・黒田勇編著『ワールドカップのメディア学』大修館書店、2003年、黄盛彬「韓国メディアの描いた『ニッポン』」同上書を参照。

〈ホームページ〉

Jリーグ：<http://www.j-league.or.jp>

アライアンス2002：<http://www02.u-page.so-net.ne.jp/qa2/tag/Alliance2002.html>

キックラブアクティブ：<http://www.c-marinet.ne.jp/~kaz/>

サロン2002：<http://www.salon2002.net/>

特定非営利活動法人日本サポーター協会：<http://www.jsa-npo.or.jp/>

今池クラブ：<http://www2u.biglobe.ne.jp/~ivc/>

(一橋大学大学院社会学研究科専任講師)